

114  
A3071



鳥刺

細宍斯杜屈記聞

天正十一年四月  
瀬脇壽人校正

瀬脇壽人校正

武藤平學筆記

明治八年乙亥十月十六日、東京出發、同日午後四時、横濱出帆、同二十日長崎ニ着ス、露國ウラジワストロク行ノ便船ナフシテ、十一月十七日マテ同所ニ滞番シ、同日漸ク便船ヲ得、午後五時、此船ニ乗込、本地ヲ出帆ス、是レ露ノ屬國、フィンランド人ノ商船、シベリヤト号スル小蒸氣ナリ、此船ハ航海中、蒸氣ヲ用ヒス、唯港内出入ノ時ノミ

外務省





蒸氣ヲ用フ是レ此船甚々狭小ナルカ故ナリ扱  
長崎ヲ発シテヨリ三日間風静ニテ海中穩ナリ  
同二十一日ヨリ大風起リ波浪高ク大ニ困難セ  
リ連日北風ニテ舟行極メテ難ク或ハ西ニ向ヒ  
或ハ東ニ向ヒ十日ヲ経テ同三十日午後二時頃  
漸ク遙ニ露領<sup>ボツセツト</sup>ノ山頂ヲ認メ得タリ  
夕四時同所ノ沖ニ到ル地ヲ距ル事凡ハマイル  
ト云フ船中ノ衆人船長ニ謂テ云ク十日間ノ難  
風ニテ水夫甚々疲労スヘシ其難渋見ニ恐ヒス  
今夜<sup>ボツセツト</sup>ニ入港シ一夜碇泊シテ水夫ノ

疲労ヲ休息セシメン事肝要ナリ若シ水夫疲労  
シテ疾病ヲ發スル時ハ此船何レニ向ハント欲  
スルモ行コト能ハス勿論久シク寢ラスレテ働  
キケレハ壯健ノ者トイヘトモ疲レサル事ナシ  
余等カ如キ唯昼夜卧レテ働ラカサル者ニテモ  
疲労甚シ然ルニ寒風體ヲ刺カ如ク連日連夜寢  
スレテ舟ヲ全フセント心ヲ勞シ働ク者ハ豈疲  
勞セサルノ理アラシヤ願クハ休息セシムヘシ  
ト進ムレトモ船長之ヲ肯セス今僅ニウラジロ  
ストークマテ七十五六マイルナレ<sup>着港ノ後</sup>



休息セシムベシトテ、船首ヲ東北ニ向タリ、平日  
ホツセツトヨリ、ウラジワストクヘ行時ハ、内  
海ヲ走レトモ、今方ニ暗夜ナレハ、島嶼ニ觸シ事  
ヲ恐レ、外海ヲ走ルヘシトテ、舟ヲ洋中ニ出ス、衆  
人船長ニ向テ、恐ラクハ過失アラント云フ、暫時  
ニシテ六時頃ヨリ、大雪降り来リ、烈風吹起リ、加  
之波浪丘山ノ如ク、如何トモスル事能ハス、唯漂  
流スルノミ、其怒浪ノ打来ル時ニ當テハ、船將ニ  
破碎セントス、衆人愕然トシテ、安眠スルコト能  
ハス、此時風力倍々烈フシテ、櫓ヲ折ントス、其風

聲譬フルニ物ナシ、窓間ヨリ波浪ヲ見レハ、船上  
ヲ越シテ、水夫等ハ水中ニ在カ、如ク甚危シ、又甲  
板上ヲ見レハ、一面堅氷トナル、此時雪ハ益降り  
来テ、水夫ノ艱難察スルニ堪タリ、  
同三十一日午前第十一時、水夫頭一人、甲板上ニ  
在シカ、大波船上ニ漲リ、將ニ轉バントセシカ、遂  
ニ之カ為ニ卷レ、波ト共ニ海中ニ落ツ、其叫聲ヲ  
聞テ、船長ヲ始メ、水夫等マテ、船上ニ出テ、小舟ヲ  
却シ、助ントスレトモ、大船サヘ危キ勢ヒナレハ、  
小舟ヲ却スコト能ハス、倏ヒ却シ得テ、漕行モ亦



其舟覆没シテ舟中ノ水夫残ラス死ルハ顯然  
ナリ寧ロ一人ヲ捨テ衆人ヲ助ケルニ如ス今大  
船スラ將ニ沈没セントス況ヤ小船ヲヤトテ終  
ニ見ナカラ溺死セシメタリ此時怒浪殊ニ強シ  
テ船ハ之カ為ニ流サレ死体ヲモ揚ルコト能ハ  
ス憐レムヘシ哀ムヘシ衆人落涙セサルモノナ  
シ  
十二月四日迄六日間東南ノ方ヘ流サレ漸ク本  
日風靜ニシテ第十二時ヨリ東ニ向テ走ルユ  
此船ハ何レノ國ヘ行カト問ハハ船主答テ日毎

ニ西北風ノミニテウラジワストークヘ入港ス  
ル事アタハス是故ニ函館ヘ向フト云フ又午後  
四時頃ヨリハ烈風吹起テ波浪高ク其船舷ヲ打  
ツ聲實ニ雷鳴ノ如シ衆人驚愕セサル者ナク唯  
何レノ國土ヲ撰ハス早ク上陸セント評スルノ  
三  
同五日風力稍靜ナレトモ餘波尚収マラス第十  
一時ニ至テ船首ヲ西ニ向タリ又問フ何レヘ行  
ヤト船長答テ何レヘ行ト云フ目的ナレ此處松  
前蝦夷ノ沖ニシテ大島小島ト唱フ島アリ此



船ノ此島ニ觸ン事ヲ恐ル是故ニ西ニ向フ今大  
島ヲ距ルコト凡二十八九マイルナリ嗚呼ホッ  
セツトヨリ松前ノ沖ニ流レ來テ幸ニ破船セサ  
レハ一命ヲ全フスル事ヲ得タリ然レドモ未タ  
山ヲ見サレハ真ニ喜ブニ至リ難シ又午後第二  
時ヨリ船首ヲ西北ニ向ケウラジワストークハ  
行ント云ヲ聞テ船中ノ人々又難風ノ起ル事ア  
ラハ終ニ一命ヲ全フシ難カラシ恐懼ニ堪スト  
イフ同三時頃ヨリ東南風起テ船ノ走ルコト矢  
ノ如ク風烈シケレトモ波高カラス一時間ニ十

五マイル走ルト云ヘリ

同六日晴天午前第八時頃ニ漸ク山ヲ認メ得タ  
リ此處ヲリカトナホーツカトノ間ナリ第十時  
ニ山ノ近地ニ至ル其間僅ニ三マイル程ナリ船  
長太ニ悦ヒ水夫等ニ衣袴及ヒ酒ヲ與ヘ又「ジャン  
ペン」酒ヲ出シ一名毎ニ一樽ヲ與フ夫ヨリ船長  
上等ノ部屋ニ來テイヘルハ前日怒浪ノ起リシ  
時ニハ實ニ愕然タリ互ニ黙シテ言ス唯其顔ヲ  
見ノミナリシカ今日ニ至テ漸ク船ヲ全クシ來  
着スルヲ得タリ嗟噫航海家ハ愁ハリ喜アリ



又樂ミアリ、夫レ航海家ノ海上ニ出ニ當テハ  
海水ト船中トノ間僅ニ板一枚ヲ以テ境トナシ  
此板怒浪ノ為ニ破ルレハ、各人千尋ノ水底ニ沈  
没ス、恐ルヘシ悲ムヘシ、然レトモ今日ニ至テハ  
既ニ前日ノ艱難辛苦ヲ忘レタリト、多クシヤン  
ペシ酒ヲ出シテ、各皆祝シ給ヘト云ヘリ、

同七日風静ニテ波ナシ、ナホーツカノ沖ヲ走リ  
午後第五時頃ヨリハ、風モ起リタレトモ南風ニ  
テ寒カラス、又波モ少シアレドモ、敢テ船行ヲ妨  
クル事ナシ、船主出テ来テ、若シ復大風起ル時ハ

ナホーツカニ入ラントイヘル故、衆人稍ル  
安心ナル所ナリ、

同八日アスコールドト稱シ、露國ノ鑛山ア  
ル、島ノ沖ヲ走ル時、船中ノ衆人皆謂テ曰ク、  
是ヨリウラジワストークハ、僅ニ三十マイ  
ルナリ、能クウラジワストークノ港内ニ入  
リ得ヘキヤ否ヤ、若シ又風勢変スル時ハ、前  
日ノ危殆ニ逢シ、恐ルヘシ、恐ルヘシトイヘ  
ハ、船長之ヲ聞テ、北風烈シク吹ニ非シハ、容  
易ク入港スベシトテ、敢テ患ル色ナシ、

ト務省



同九日「ウラジワストーク」ノ港口ニ至ル此  
時罟楳損シテ蒸氣ヲ用フルコト能ハス漸  
ク午前第十一時ニ着港ス各人欣抃限リナ  
シ嗚呼長崎ヲ出帆シテヨリ指ヲ屈シ數フ  
レハ殆ト二十有三日ナリ平日順風ニテ来  
ル時日ハ三四日ニシテ入港シ或ハ七八日  
ニテ着スルモアリ豈料ヤ今度ノ航海ハ三  
旬以上ニシテ危殆且鬱陶ニ堪スト歎セ  
リ  
又船長ノ曰ク我初ヨリ冬月ニ至レハ北海

ノ甚々危キ事ヲ知ル然レドモ船將  
ニ仕フル身ナレハ其命ニ背ク能ハ  
ス預メ此行ノ危キコトヲ察知スレド  
モ出帆セシナリサレド既ニ昨年露  
ノ商船「クレヤール」号ノ蒸氣船ハ十二  
月長崎ヲ出帆シテ「ウラジワストーク」ニ  
来リシニ夏月ノ航海ニ異ナルコトナ  
カレシト聞ケリ此行我カ長崎ヲ  
出帆セシハ十一月ノ半ハナレハ何ノ患  
カ有ヘキト決心シテ渡来セシニ不幸



以上航海中激浪  
怒濤困難ノ状  
ヲ説ク

ニシテ危キ難風ニ逢タリ、諸君今後  
此行ノ風難ヲ追想シ、冬月ハ必ス北海  
ヲ航海スルコトナカレ、予モ十月以後  
ハ誓テ此北海ヲ策マシ、凡ソ人間モ  
壽命アツテ、而シテ後ニ高法ヲ行ヒ  
國家ヲ富有ニス、サレハ富有ノ本ハ  
壽命ニ在リ、慎ムヘシ、輕スヘカラス、我船  
長ト為テヨリ、既ニ二十年ニ垂ンタレ  
ドモ、未タ此行ノ如キ、危難ニ逢シ事ナ  
レト云ヘリ、

以下緊要

同九日ウラジワストークニ上陸シ直ニ  
日本高原田茂吉郎方ヘ罷越シ種々形勢  
ヲ尋問ス、原田答ヘテ、當地誠ニ穩ナリ、諸  
商品日毎ニ下直ニ相成、各國ヨリ商人ド  
モ入込ニ商船日ニ七八艘入港セシ事モ  
アリ、其外軍艦ノ出入甚多シ、人家ハ日ニ  
増シ、去年ヨリハ甚般系華ナリ、萬事用  
便差支ユル事ナレ、サレド或ル士官及ヒ  
兵隊水夫等ハ、兎角非道ナレ事ノ三少カ  
ラス、商品ヲ取り、之ヲ其懐ニシテ、價

夕  
番  
省

卜  
務  
省



ヲ與ヘス或ハ商品ヲ借ト云フテ持  
チ販リ之ヲ返サバル等ノ事モアリ諸  
人同却且迷惑スルコト毎度ナリ最  
モ獨リ我カ店ノミニ非ス西洋人ノ店ニ  
テモ同様滿洲支那ノ酒店或ハ呉服  
店ヲトニ至テハ我等ニ對スルヨリ尚  
非道ナル事多シ畢竟各國ノ領事館ナキ  
故ト察セラル併シ明年ハ米佛ノ領事館  
建築アル由然ル上ハ非道ナル事モアルマレ當  
時ノ所ニテハ日本人ヲ叮嚀ニ取扱フトイヘ

亦非道ナル事多シ滿洲人支那人ニ至テハ禽獸  
ヲ扱フカ如シ實ニ見ニ恐ヒサル事アリト云ヘ  
リ  
同十日佛人「ハ」ブルト云フ者ニ面會シ其說  
ヲ聞ニ同人ハ先年徳川氏將軍タル時萬器ヲ賣  
弘メタル者ニテ日本ノ事情ニ明ラカニシテ且  
能ク和語ニ通ス此者當八月頃ヨリウラジワス  
トクニ商社ヲ開ントテ貨物ヲ持越シ小店ヲ  
開キ居レドモ全ク商法一方トモ見ヘサル處ア  
リ依テ他事ヲ云ス對坐シテ先ツ商法ノ事ヲ語



リ其後彼ヨリ東京ノ物騒カシキ事ヲ申出セシ  
故之ヲ聞ニ知ラサル事ナク、全名渠カ説ノ如シ  
足下ハ何ニ由テ斯ク能ク知レルヤト問ハハ曰  
友ヨリ書状来リ、或ハ電信、或ハ新聞紙ニテ知ト  
云フ、夫ヨリ又朝鮮ノ事情ヲ咄セシ故聞タリシ  
ニ、是亦頗ル精シケレハ、全ク商法ノミニ滞、在ス  
ル者ニアルヘカラス、同氏ノ説ニハ、我當八月ヨ  
リ本港ニ商社ヲ開キ、滯番シ、種々探索シタリシ  
ニ朝鮮征伐一件ニテハ、各國ニテ餘程難論アル  
事ト見ヘタリ、英米ニテ征伐シ聞ントスル時ハ

露ト獨ト之ヲ肯セス、露ニテ聞ントスル時ハ、英  
ニテ支那ニ左祖シ、而シテ支那ヨリ朝鮮へ援兵  
ヲ出サセ共ニ露ト戦ントスヘシ、獨逸モ亦朝鮮  
ヲ聞ントスレトモ、露ヲ恐ルト云フ、露ニ至テハ  
獨リ朝鮮ヲ聞ントスルノミニ非ス、支那ヲモ併  
吞セントスト見ユ、今各國ニテ朝鮮ヲ聞ントス  
ル時ハ、其事頗ル難シ、日本ニテ聞ク時ハ、誰有テ  
カ之ヲ答シ、併シ露ニ於テハ快シト思フマジ、如  
何トナレハ朝鮮ヲ聞キシ後、支那ヲモ併セント  
スル心アレハナリ、嗚呼露ノ膽畧ノ遠大ナル事



恐ルヘク又盛ナリト云ヘシ今聞キタルヲリカ  
コライスケボツセツトウラジワストイク五  
港ノ備ヘニ軍艦十四艘アリ此船時々交代シテ  
巡見シ又朝鮮海ニモ巡航シ朝鮮ノ形勢ヲ窺ヒ  
殊ニ咸鏡道ノ港内ヲ巡見シ碇泊スル事アリ若  
シ日本ヨリ朝鮮ト事変アルニ至ラハ加勢スル  
モ計リ難シトイヘリ  
同日英人ラーカフト云フ者イヘルハ朝鮮ノ頑  
固ナル鎖國ヲ聞ントスルモ容易ク聞キ難シ露  
ニテ專ラ聞ントスルノ意アリ各々先ヲ争テ聞

ントスル時ハ人ノ死傷少カラス且大金ヲ費シ  
聞クトイヘ凡何ノ利益モアルマシ既ニ着手シ  
テ聞ク事能ハサル時ハ却テ自己ノ疲レトナリ  
且露ト隔意ヲ生スル時ハ後ノ大患ヲ發ス寧ロ  
朝鮮ヲ聞ンヨリハ其金ヲ以テ自己ノ要器ヲ造  
リ外患ヲ防キ其國ヲ全フスルノ肝要ナルニ如  
ス今數千ノ人命ヲ失ヒ巨萬ノ金貨ヲ費シ朝鮮  
全國ヲ併セ得ルトモ終ニハ露ノ地トナルベシ  
然ルニ日本ニテ朝鮮ヲ聞ントスル用意アリト  
聞キ其説ヲ信セサリシガ米國新聞紙ヲ見ニ此

外務省



金麟昇ヲ連承  
リシトニ有風説

説アリ日本ニテ聞キテ後終ニ如何ナランヤ各  
々深ク考フベシ我ハ商客ナレハ何レノ國ヨリ  
聞キテモ唯其港ニ於テ貿易ヲ許サハ我カ渡世  
ノ幸ナリトイヘリ

同日稻佐郷ノ源三郎ト云フ者先年ヨリ露学修  
業ノ為露國軍艦ニ乗込ミ「ガラジワストーク」及  
ヒ「ナホーツカ」<sup>ホッ</sup>「セツト」<sup>アリカ</sup>「コリライス  
ケ」邊航海シ此五港ノ景況ヲ目撃セリ此者余カ  
旅宿ニ來テイヘルハ航海中或日午餐ノ時船長  
及ヒ士官トモノ咄ヲ聞シニ六月中或ル日本人

方今使韓ノ件ニ  
關ル説

朝鮮人一名ヲ連行キ日本ニ渡リシカ何ニ依テ  
朝鮮人ヲ連行シヤ未タ詳ナラス商法ナランニ  
ハ朝鮮人ヲ連行トモ何ノ利モアルマシ又政府  
ニ関スル事アラハ露籍ノ者ナレハ何ノ用ヲモ  
為ヘカラス又小使ニ使フ時ハ言語不通ニテ不  
便ナラン又日本人ト朝鮮人ト比スレハ朝鮮人  
頑愚ニシテ用事ヲ為コト能ハス何故ニ連行シ  
ヤ更ニ其意ヲ解セズ多クハ商法ノ為ナラント  
イアラ聞レ由又或時咄シケルハ今日本ニテ朝  
鮮ヲ征討スル説アリ日本ノ小國ヲ以テ朝鮮ヲ



討ントハ何事ソヤ、ホルモ一サノ例ニハ行マシ  
朝鮮ハ小國タリトモ、人氣和シテ勇アリ、我カ露  
ノ威勢ヲ以テ、聞ントスレドモ、尚之ヲ聞クコト  
能ハス、然ルニ日本ノ威ヲ以テスルトモ、聞キ難  
カルヘシ、先年ホルモ一サニストラ、踏ミ止ル事能  
ハス、況ヤ朝鮮ヲヤト云テ、頻リニ笑ヒシ由  
同夜元露藉ノ者、方今米國ノ藉トナリシ、ポール  
マシトイフ者ノカタニ行シニ、同氏ノイヘルハ  
今日本ニテ、朝鮮ヲ征伐スルト聞シカ、日本ノ軍  
器具備シタル處ヲ以テ、朝鮮ヲ討時ハ、彼ノ弱兵

何ソ之ニ敵スヘケンヤ、且其人和スト、雖氏、器械  
ナク、又利ヲ見ル時ハ、必ス異心ヲ生スル風アリ、  
貴國ニテ之ニ勝ハ、必然ナリト云フ、余答テ我カ  
國ニテ、朝鮮ヲ討ツ事ハ難カルヘシ、又討ト討サ  
ルハ、政府ニ在リ、我カ関スル處ニ非ス、唯余カ関  
スル所ノ者ハ、高法ヲ以テ、利益ヲ得ニ在リトイ  
ヘハ、彼ノポールマン、突テイフ様、足下ノ言ノ如  
ク、我モ亦高法ヲ以テ、利ヲ得ント欲スルノミト  
云ヘリ、  
同夜能登ノ國人久藏ト云フ者、數年間ウラジワ



ストーグニ在留シテ洋人ニ役セテレ或ハ滿洲  
人ノ諸港往返鑛山行等ノ小船ハ船長ヲ勤メ渡  
世セシ者アリ此者余カ旅宿ニ来リ問フテ云フ  
様朝鮮トノ戦争ハ如何アリシヤ下僕當地ニ在  
テ毎ニ朝鮮人ト同居シ傭役ヲ共ニシ相親ニ居  
シカ或日朝鮮人下僕ニ向テ云フ様日本ノ軍艦  
江華島ニ来テ發炮セリ依テ我國ヨリモ之ニ應  
ジ戦ヒシカ日本ノ軍艦直ニ出帆シタルト聞タ  
リ日本ヨリ何等ノ事故アリテ我カ國ヲ討シヤ  
隣國ニ在テ干戈ヲ用ユルハ是レ實ニ好事ニア

ラス北京ト我カ國ヲ見ヨ相和シ相親シミ古来  
曾テ争ヒタル事ナシ然ルニ獨リ日本ノミ我國  
ヲ侵ントスルハ何等ノ故ナルヤ貴國ヨリ討時  
ハ弊國モ亦之ニ應シ戦争スヘシ然レモ干戈ハ  
凶器ナリ願クハ之ヲ用ヒサル事ヲ欲ス我本地  
ニ在テ日本人ト相交ル事本國ノ人ヨリモ尚厚  
ク本國人ヨリモ尚懷シ又汝カ知ル如ク共ニ未  
タ曾テ不禮ノ事アラスト云シ由外ニ又或ル朝  
鮮人ノ説ニハ日本ヨリ我カ小國ヲ討ントスル  
ノ策アルト聞ク既ニ江華島ニテ戦争アリ直ニ



以下露人待遇  
情況ニ関ス

日本船飯帆セシ由日本一國ヲ以テ我々國ヲ討  
ツ時ハ何ソ恐怖スル事カアラン我カ朝鮮小ナ  
リト雖氏日本ヨリ攻メ来ルヲ防クニ足ト云テ  
突フ者アル由久藏此等ノ説ヲ聞テ或ハ感歎シ  
或ハ憤怒ニ堪サル事アリシトイヘリ  
同十一日余ウラジワストロクヨリ驛馬ニ乗テ  
吹風ニ赴ク途中十五マイル毎ニ露ノ驛場アリ  
家數二十有餘或ハ十有餘或ハ二三軒又ニヨリ  
スケトイフ處ハ三百有餘家アリ驛毎ニ馬ヲ出  
シ道案内トシテ露人一名馬ニ乗テ先導ス其待

遇誠ニ丁寧ナリ他國人ヲモ皆此ノ如ク取扱フ  
ヤ否ヤ未タ知ラス其驛毎ニ日本人来ルト云テ  
余カ手ヲ握テ懐カシク思フト見ユ或ハ酒ヲ勸  
メ或ハ茶或ハ熟肉等ヲ出シ余ニ與フ其志シ願  
ル誠實ナリ是レ田舎ユエカ又ハウラジワスト  
ロク驛通官ヨリ丁寧ニ致セト云ヒ送リシカ實  
ニ甚々丁寧ナリ同日夕刻滿洲人四名来テ宿ヲ  
乞フ露人承諾シテ内ニ入レ一名一泊ノ料一ル  
ーゲット云フ滿洲人四ルーゲット出シ亭主ニ與フ  
亭主其貨幣ヲ懐ニシ暫クニシテ滿洲人ノ汚垢



ヲ責テ終ニ門外ニ押出ス。滿洲人六ニ怒テ過刺  
與ヘシ處ノ四「ル」ブヲ返セト。頻リニ之ヲ促セ  
トモ亭主一錢ヲモ返サズ。唯罵テ追攘フ。三滿  
洲人怒テ亭主ノ惡心及ヒ露人ノ暴ナルヲ嘲リ  
金ハ汝ニ與フト云テ立去タリ。余其初メ露人ハ  
甚々實直ナリ。是レ田舎ノ民故斯ク質朴ナルモ  
ノト思ヒ居シカ。案ニ違ヒ此暴惡ニハ驚キタリ  
余モ亦如何アラント一心ヲ悩マシ一夜眠ラス  
レテ夜ヲ明セシニ終ニ何等ノ事モナク益町噲  
ナリ。ウラジワストロクニ於テ他國人ノ郡集ス

露人ノ滿洲人  
ヲ待遇スル情況

ル處ニテモ露人外見ヲ憚ル事ナク。滿洲人ヲ扱  
フ「」恰モ禽獸ノ如シ。況ヤ他人ノ見サル所ニ於  
テヲヤ露人ハ今其威ヲ萬國ニ輝サントスル勢  
ヒナレハ滿洲人ノ隋弱ナルヲ激セシメント欲  
スル歟。滿洲人ハ露人ヲ怕ル事實ニ虎狼ヨリモ  
甚シ。又露人ノ朝鮮人ヲ扱フヲ見レハ頗ル慈愛  
ヲ加フル處アリ。朝鮮人ト滿洲人ト喧嘩スル事  
アリテ其初メハ僅ニ兩人ナルニ雙方終ニ百餘  
トナリ共ニ露官ニ訴フル「」アリ。露官之ヲ裁判  
スト雖モ明白ニ其理非ヲ辨セス「」テ朝鮮人ヲ

露人ノ朝鮮人  
ヲ過スルニ仁慈  
ヲ以テスル談

ト務



助ケ満洲人ヲ罰ス是故ニ満洲人ト朝鮮人ハ常  
ニ不和ナル意アリ且朝鮮人ハ露人ノ後援ヲ頼  
ミ傲慢ナルト多ケレトモ満洲人露人ヲ憚テ之  
ニ敵スルト能ハス是ヲ以テ考フルニ露人朝鮮  
ヲ討スレテ慈愛ノ心ヲ示シ飯服セシメント計  
ルナルベシ

余カ吹風金麟昇ノ家ニ到着セシ夜村中ノ人民  
老少共ニ群集シ余カ平安ヲ訪ヒ且金麟昇カ安  
否ヲ問フ次ニ又麟昇ハ何故ニ日本ニ留ルヤ何  
事ニテ帰ラサルヤ貴下ト共ニ往々レハ貴下ト

共ニ飯り来ルベキ事ナリ併シ疾病ニテモアル  
ヤト頻リニ麟昇ヲ伴ヒ行サルヲ憾ミタリ扱夫  
ヨリ余ハ麟昇カ送ル處ノ書翰及ヒ寫真其他金  
ヲ出シ奥へ前後ノ事情ヲ説キ聞セケレハ坐中  
ノ者トモ始テ大ニ感服シ疑團モ晴レ欣然タル  
様子ニテ日本人ハ實情深シトイヒ且貴下ノ懇  
情至レリトテ坐中皆捧謝シタリ夫ヨリ悉ク書  
翰ヲ開封シ衆人見終テ云フ様今麟昇日本ノ外  
務省ニ仕ヘ平學君ト同居シ其後ハ瀬股君ノ宅  
ニ寓居スル由是レ麟昇カ幸ヒナサ細君少シモ



憂フルト勿レ我等ニ於テモ安堵シ且欣喜ニ堪  
ストテ衆人皆余ニ向テ禮ヲ述フ扱其後金先達  
俞氏等余ニ謂テ曰ク迹頃世説ヲ聞ニ貴國ト朝  
鮮ト京畿道ノ江華島ニ於テ戦争アリト虚カ實  
カ貴下能ク之ヲ知シ願クハ其詳ナル事ヲ語レ  
余之ニ答ヘテ江華島ノ事件未タ其詳細ヲ聽ス  
余カ東京ヲ登セシハ九月十六日ナリ是故ニ事  
件ノ後未タ日數ヲ經サレハ其詳ナル事ヲ知ス  
トイヒタレハ金先達等貴下ノ言虚ナルヘシ今  
方ニ朝鮮ト合戦スト云ヒタランニハ實情ナル

ヘシト頻リニ此事ヲ聞ントス余之ニ答テ我ヨ  
ク此事ヲ知ル時ハ何ソ之ヲ隱サンヤ既ニ麟昇  
ト兄弟ノ約ヲ為シ昔日貴村ニ久シク留リ諸君  
我カ心ヲ知レリ何ソ疑フノ甚シキヤ從ヒ戦争  
ノ事情ヲ咄ストモ我カ関ル事ニアラサレハ憚  
ル所ナシト云ヘハ金先達貴下ノ言ホ一理アリ  
トテ止ヌ同氏又云フ今日本ト我カ古國ト戦フ  
時ハ露國ノ人我カ古國ノ疲レニ策シ推シテ境  
内ヘ踏込ニ是レ我カ領地ナリトテ兵隊ヲ備ヘ  
入テ故國ノ者ヲ煩ヌヘシ既ニ此滿洲ノ地ヲ開

露ノ蚕食ヲ恐ル談

外務省



韓人ノ故國ヲ思フ  
情況

シ時モ直ニ軍艦ニテ、兵隊ヲ送り、上陸シテ以テ、  
標柱ヲ建テ、是レ我カ地ナリト云ヘリ。又此類ヲ  
以テスヘシ、嗟噫我カ故國ハ、何ノ事故アリテ、日  
本ト和セサルヤ、我等古國ニ背キ、今此露地ニ在  
テ、露人ノ恩愛ヲ受ルトモ、快シトセス。帰ラント  
スレトモ、帰ル丁能ハス。今本國ニ於テ、他姓ノ王  
立ツ時ハ、必ラス古國ニ帰ラント、頻リニ愁心ヲ  
顯シケル。又朴氏ノ説ニ、我等前年凶作ノ折柄、國  
政ノ苛酷ナルヲ怨ミ、憤怒ニ堪スレテ、君ニ背キ  
國ヲ脱シ、露地ニ來テ、入籍シ、露國ノ恩愛ニ預ル

ト雖、臣露國ノ恩ハ忘レ易シ。一旦君ニ背クトモ、  
旧恩ハ忘レ難シ。仮令一時忿怒ニ乘シテ、本國ヲ  
脱スレトモ、實ニ故國ノ情ヲ起セリ。今現ニ我等  
カ身体ハ、此地ニ在テ、精神ハ尚故國ニ在リ。是レ  
本國ノ旧恩ノ忘却シ難キ所以ナリ。是故ニ今此  
地ニ往スレトモ、常ニ旧國ノ平安ヲ祈リ、我等國  
事ニ関セスト雖、臣其安否ヲ聞ント欲シテ、日夜  
精神ヲ勞シ、天ヲ仰キ、地ニ俯シ、行時トシテ、故國  
ノ平安ヲ祈ラサルハナシ。故國ノ人來ルト聞時  
ハ、農時ト雖、臣鋤ヲ拖テ、鋤ヲ棄テ、馳セ往テ、國家



ノ安否ヲ問ヒ、次ニ親戚知己ノ無事ヲ聞キ、心補  
ヲ傷マシム、我等今故國ニ還ル事能ハサレドモ  
只管故國ヲ思フ、是レ人情ノ然ラシムル所ナリ  
トテ、坐中皆歎息ス、時ニ又坐中ノ老人嗟歎シテ  
今貴國ト相親ニ互ニ往來スル時ハ、我等故國ニ  
還ルコトヲ得テ、共ニ無事ヲ樂ニ相和シテ、兩國  
親睦セシコトヲ願フトイヘリ、壯年ノ者ハ日本へ  
渡リ往シトイフ者多シ、或ハ又麟昇ノ事ヲ羨ム  
者アリ、實ニ吹風ニ住居スル脱韓ノ者ハ、我カ皇  
國ヲ慕フノ心情甚々深シ、余嘗テ吹風ニ在留ノ

時ハ、實ニ老少ノ別ナク、訪ヒ來テ相親ニ、又村中  
家毎ニ余ヲ招キ、酒食ヲ出シテ饗應セリ、是ヲ以  
テ考フレハ、脱國ノ者故カ知サレトモ、我カ皇國  
ノ人民ヲ愛慕セリ、又其本國ノ人民モ、其人情ハ  
概ネ相同シカルヘシ、然レモ江華島ノ一條ヲ以  
テ見ル時ハ、本國ノ人民ハ、其人情異ナル所アラ  
シカ、

或ル滿洲人姓ハ王名ハ吉トイフ者、ウラジワス  
トクノ米國商人、ゴトベシカ商店ニ居シカ、一  
日此王吉余カ旅宿ニ來リ、世談ノ語次露ノ開港



露人満洲人ニ對シテ  
暴行アリテ話

場ホツセツトナホーツカヲリカ<sup>リ</sup>ヨチヤシ等  
ノ景況ヲ咄セリ<sup>ヤツガレ</sup>卑生此地ニ来テ未タ久シカラ  
サレハ詳細ナル事ハ知ラサレドモ満洲人ノ説  
ヲ聞ニ唯露ノ暴ナル事ヲ云フ此近海ノ各港ニ  
在ル満洲人露ノ為ニ苦シム者多シ其激怒ニ觸  
レハ直ニ追攘ントテ或ハ家ヲ毀チ或ハ偏地  
ニ謫シテ以テ之ヲ役ス又鑛山アル<sup>ア</sup>スコール  
ドトイフ島ハ素ヨリ満洲人ノ鑛山ニシテ露人  
ノ鑛山ニアラス四五年以前露人其艦ヲ以テ人  
負ヲ送リ<sup>ア</sup>スコールドニ上陸セシメ其島ヲ二

部ニ分チ半島ハ満洲半島ハ露ト為シケレドモ  
今ハ殆ト露ノミノ鑛山トナリ満洲人等ヲ追退  
ケ決シテ逃付ケス又露ニテ満洲人ヲ雇フテ以  
テ金ノ在處ヲ問ヒ而シテ後ニ嚴シク役スルヨ  
シ又露ヨリ雇レス自己ニテ行時ハ直ニ捕縛ス  
ル由露人ノ暴ナルコト實ニ甚タシト云フ夫ヨ  
リ朝鮮ノ事ヲ聞シニ朝鮮ノ事情ハ未タ聞ス然  
レモ卑生カ北京ヲ去ノ時ハ朝鮮人多ク北京ニ  
入シト云シ故朝鮮人ハ何故ニ北京ニ到ルヤト  
問ヘハ王氏答ヘテ何故カ知ラス我素ヨリ平民



ニテ何等ノ事情モ辨ヘス又我カ関スル事ニ非  
サレハ唯朝鮮人、多ク入京セシヲ見タリト答  
フ  
米國人「ゴ」ペルノ曰、此「ウ」ラジワスト「ク」港ハ  
四方ノ山高キヲ以テ、船舶ノ碇泊スルニ極メテ  
便ナリ、大風ノ時ト雖モ、港内波浪ナシ、終ニハ大  
繁華ノ良港トナルベシ、各國ノ人民日ニ倍シ、戸  
數月ニ加ハレハ、商法モ亦隨テ隆盛ニ赴クヘシ  
唯恐ルヘキ者ハ、虎ト露ノ官員ナリ、次ニ又兵隊  
水夫モ、甚々暴戾ナリ、扱此虎ハ、人家ニ畜ヒ置ク

所ノ牛馬或ハ豚ナトヲ飼ンテ去ル、露人ハ手ニ  
當ル物品ヲ掠メ去ル、又官員ハ我等ノ商店ニ來  
テ物ヲ買ニ、全ク金ナク、暫時貸ト云フ、官負ナレ  
ハ、聊カ違約モアルマシト思ヒ、時日ヲ刻シテ之  
ヲ貸ス、其後時日ノ過ルハ論ナク、終ニ此借錢ヲ  
返サスシテ、本國ニ飯ルモアリ、或ハサハレシニ  
行キ、或ハ上海日本等ヘ行キ催促セントスルニ  
其人ナシ、斯様ナル事ニテ、商品ヲ失ヒシ事數ヘ  
難シ、又此事ヲ、刑法官ニ訴フル時ハ、負債主不在  
ナレハ、詮儀スルコト能ハス、歸港ノ後、断決スヘ



領事館ノ緊要  
正論

レト云ノミニテ皆其終ナリ、嗟噫露ノ暴ナル事、  
彼ノ猛虎ニ同シ、是レ畢竟當港ニ、各國ノ領事館  
ナキカユエナリ、若シ領事館アル時ハ、斯ク兇暴  
ニシテ不法ナル事ハアルマシ、明年ハ我カ米國  
ト、佛國獨逸三國ノ領事館ヲ設ル由ナレハ、晏然  
トシテ高法ヲ行フニ至ルヘシ、貴下ノ知己日本  
ノ商人一名當春ヨリ番頭手代ヲ携ヘ來テ、開店  
シ、其後當秋日本ノ商人四五名來リ、又長崎ノ竹  
ノ藝ナトモ來テ流行セリ、明年ニ至ラハ日本ヨ  
リモ多ク渡海シテ、開店スルヨシ、然ル時ハ日本

ニテ亦領事館ヲ設クヘシ、領事館ナケレハ商人  
ノ難儀ハ顯然タリ、領事館ノ設置實ニ甚ク肝要  
ノ事ナリ、既ニ當五月中、日耳曼國ノ「コンシユル」當  
港ニ來リ、我家ニ滞留シ、此地ノ景況ヲ見テ飯リ  
タリ、此「コンシユル」モ領事館ヲ置ントイヘリ、日  
耳曼國ノ商店多ケレハ、必ス其設置アルヘシ、又  
日本ハ貴下ノ知り給ヘル如ク、瀨脇諸岡兩氏、日  
耳曼「コンシユル」ト同シク、我家ニ滞泊シ、同船ニテ  
歸ラレタレハ、日本ニテモ必ス領事館ヲ設ルノ  
趣意ナルヘシ、今本地ノ形勢ヲ以テ見ル時ハ、各



國ヨリ領事館ヲ置サシハ其商人ノ難儀ハ必然  
ナリ況ンヤ日本人ノ未タ商法ニ暗キ者ハ露人  
ノ為ニ難儀スヘシ右ニ述ル如ク各國ニテ領事  
館ヲ設ル時ハ必ス暴ナル事無カルヘシ扱夫ヨ  
リ各國ノエシユル一和シテ商事ヲ謀ラハ何  
ノ憂ナク安然トシテ商法ヲ行ヒ各國皆其國益  
ヲ起ス事疑ナシ豈美ナラサランヤ豈好カラサ  
ランヤ凡ソ各國ニ於テ其國ヲ富スハ商法ニ越  
ル者アル事ナシ淺層ニ考フル時ハ各人其身一  
人ノ為ニスルニ似タレト其實ハ其商人ノ國ノ

為ナリ殊ニ當港ハ追日繁華ニ赴クヘキ地ニシ  
テ就中日本ニ近シ貴下今日本ニ販リナハ瀬  
諸岡兩氏ニ委シク此事ヲ説ヘシ兩氏ハ此地ノ  
景況モ知り且瀬脇ハ英蘭ノ書ニ精シ諸岡ハ露  
ノ語学ニ明ラカナルハ當港ニ館ヲ設ケ兩氏在  
番スレハ日本商人ノ大幸ナリ請フ貴國ノ為ニ  
此事ヲ瀬脇ニ説ケトイヒシユエ余販國セハ之  
ヲ説ント答ヘタレハゴトべシ大ニ悦ヘリゴト  
べシハ寫実ナル者ニテ各國ノ形勢ヲ問ニ隱サ  
スシテ皆其實ヲ告クテラジワストークニ行キ



博識子ノ事  
ニ有コトハル氏ノ説

本地ノ事情及ヒ各國ノ形勢ヲ聞ントスル者ハ  
先ツゴールペルヲ訪ヘシ又英人ニ事情ヲ聞ント  
スル者ハ、<sup>ト</sup>ラーカフヲ訪ヘシ亦誠實ノ人物ナ  
リ  
又ゴールペルノ曰ク日本ノサハレシハ、鑛山多シ  
第一ニ石炭次ニ銅、鉛、水銀、又金、銀、硫黃等アリ其  
外、漢、獵ニテ甚タ益アル地ナリ然ルニ今之ヲ露  
ニ與ヘ、蕞爾タル小島ト換タルハ、實ニ愚ニ非ス  
ヤ日本ノ暖國ヨリ見ル時ハ、<sup>ト</sup>サハレシハ寒國ニ  
テ萬民住居ニ堪カタカルヘケレドモ露ノ寒國

ヨリ見ル時ハ、<sup>ト</sup>サハレシハ暖國ニシテ、老少ノ人  
民トモニ働クニ甚タ便ナリ日本ニテハ、<sup>ト</sup>サハレ  
シヲ極寒ト稱スレトモ露國ノ寒氣ノ半ニ至ラ  
ス素ヨリ露人ハ其本國極寒ノ地ナルヲ以テ、<sup>ト</sup>サ  
ハレシノ寒氣ニハ恐ル、事ナク能ク之ニ堪ユ  
日本ハ暖國ナレハ、國人少シノ寒風ニテモ門ヲ  
鎖シテ働カス是故ニ、<sup>ト</sup>サハレシハ露ニ與ヘシモ  
ノナラン然レハ大益アル地ヲ露ニ與ヘタルハ  
愚ナリ、愚ナリ、余先年、<sup>ト</sup>サハレシニ到テ地質ヲ見  
シニ甚タ肥地ナリ又蝦夷地ハ鑛山モ甚タ多ケ

ト  
タ  
タ



レハ必ス本地ニ多ク、人民ヲ植ヘ聞クヘシ、若シ  
カハレシノ如ク、人民ヲ住居セシメサル時ハ、又  
甚タ危ク、寒國人ノ有トナラン、彼寒國人ハ、獨リ  
サハレシノミヲ欲スルニアラサル事明ラカナ  
リ、拙生寒國人ノ情ヲ見、且ツ其行ヒヲ察スルニ  
大ナル計策アルヘシ、見給ヘ、兩三年ノ内ニハ、又  
何事ヲカ醸シ出シ、穩カナラサルトアラント云  
ヘリ、又「ゴ」ペルノイヘルハ、拙生滿洲語ニ明カ  
ナラサレ、粗其意ヲ解シ、日用ヲ達スルニ足ル  
或日滿洲人一名、我カ家ニ來テ、我カ妻ニ逢ヒ、共

ニ坐シテ談話スル所ヲ聞シニ、半ハ解シ、半ハ解  
セス、又兩三日、前朝鮮人ト滿洲人ト、談話スルヲ  
聞シニ、其意ヲ詳ニスルト能ハサレハ、答フルニ  
由ナシ、滿朝人等歸テ後、妻ニ向テ其意ヲ聞シニ  
答テ、今滿洲人ノ説ニテハ、寒國ニテ、朝鮮ヲ併セ  
ントスル事ヲ説タリ、其説ニ、朝鮮王ハ、北京ヨリ  
王位ヲ受ルヲ以テ、北京ノ臣ニ異ナラス、毎年冬  
至元旦ノ禮トシテ、其使臣北京ニ入朝セリ、斯ク  
君臣ノ際ナレハ、朝鮮ニ外寇アル時ハ、救援セス  
ンハ、育ヘカラス、今寒國ヨリ、朝鮮ヲ併吞セント



スルノ意甚タ深シ既ニ朝鮮ニ外寇ヲ受レハ其  
餘波必ス北京ニ及フ是故ニ清朝ハ共ニ連合シ  
テ外寇ヲ拒スンハアル可ラスト訓春江ノ長官  
ノ説ナリトイヘリゴト又余ニ向テ貴下ノ  
知レル如ク荆婁ハ支那蘓州ノ者ナレハ北京語  
滿洲語ニ明ナレハ此兩國ノ事情ヲ聞ントスル  
時ハ逐一探索シ得ヘシ滿洲人等ハ日本ニテ朝  
鮮ヲ聞ントスルノ事情ハ少シモ知スシテ唯他  
國ノ朝鮮ヲ侵サン事ヲ慮ルノミ露ト滿洲ノ間  
ハ實ニ火水ノ相激スルカ如クニテ滿洲人憎シ

ニ有者ハ獨リ露ヨリ是タシキハ無シ又常ニ露ノ滿洲人ヲ扱シ見シ是  
タ幕府アリ是故ニ滿洲人ハ露ヲ憎

怒ムルモ又宜ナリト云フ

ゴトペル又云ク拙生先年十二月滿洲人ト朝鮮  
人ト交易ノ日ニ訓春江ノ滿洲人ト同シク朝鮮  
ニ入り滿洲ノ商館ニ番リ朝鮮ノ市中ヲ見シニ  
不淨極メテ甚シ又牛ノ多キ事ハ舉テ數ヘカタ  
ク又山丘ヲ眺ルニ金銀極メテ多カルベシ若シ  
此鑛山ヲ開カハ金銀山ノ如クナラントイヘリ  
余ゴトペルニ向テ足下滿洲人ト共ニ朝鮮ニ入  
リ時朝鮮人足下ヲ見テ敢テ何等ノ事モ云ハサ  
リシヤト問タレハゴトペル朝鮮人等頻リニ我



以下  
開帆後ノ話

ヲ見タレド何レノ國ノ人タルヲ知ラス唯滿洲  
人ト思ヒシナルベシ但シ拙生此時滿洲人ノ衣  
服ヲ着シ滿洲人ノ帽子ヲ戴キタレハ少シハ異  
ナル所アルト雖モ滿洲人トシテ疑フ事ナシ素  
ヨリ訓春江ノ官員ト相議シ訓春江ノ官員モ滿  
洲館ニ在レハ儼ヒ異國人ナリトモ朝鮮人敢テ  
答ムル事ナカルヘシ最モ市中ヲ徘徊スル事ヲ  
禁スト云ヘリ

同十七日「ラジワスト」ク出帆航海中香港人  
某余ニ語テ曰ク今我カ清國ニ於テ西洋ノ術學

ヲ傳習シ萬器悉ク洋製ヲ學ヒ一トシテ足サル  
物ナキニ至リ銃炮彈藥ヨリ軍艦製作等ニ至ル  
迄悉皆自國ニテ之ヲ製ス政体モ將ニ歐洲ニ倣  
ハントスレトモ旧弊ノ脱シ難キ所アリテ未タ  
盡ク化スル事能ハス實ニ頑愚ナリ愚察スルニ  
歐洲ノ規則トイヘドモ悉ク善ナルニ非ス必ス  
非ナル所アリ是故ニ悉ク其規則ニ倣フ事ヲ要  
セス彼カ長スル所ヲ採テ我カ短ナル所ヲ補フ  
時ハ極メテ便宜ナルニ至ルヘシ今我カ國ニ軍  
艦數艘アリテ船長ヨリ士官及ヒ兵隊水夫ニ至



ル迄悉ク我カ國人ナリ、髡令スルニハ英語ヲ用  
フ然レトモ北京ニテハ未タ開化セスレテ、軍服  
トイヘトモ、從來ノ衣服ナレハ、百事ヲ為ニ至テ  
ハ、實ニ甚タ不便利ナリ、加之牛尾ノ如ク、頭髮ヲ  
垂レ、其躰甚タ醜ク、事ヲ為ニ當テハ、髮尾他物ニ  
觸レ、急ニ事ヲ為ス事能ハス、既ニ船製モ洋製ニ  
似フタレハ、其他モ洋風ニシ、以テ事ヲ為サハ、極  
メテ便利ナルヘシ、又他物ニ觸テ、常ニ甚タ困却  
スルヨシ、獨リ髮ノニニ非ス、衣袴モ亦然リ、是我  
カ平日、甚タ欲セサル所ナリ、韃種ノ政体ヲ離レ

外夷ノ風俗ヲ脱シナハ、斯ノ如キ事ハアルマシ  
今貴國ノ風ヲ見テ之ヲ羨ム所ヨリ、國ノ耻ヲモ  
顧ニス、斯ク談話ニ及フナリ、貴國ノ如キハ、實ニ  
美風トイフべシ、弊國モ今洋術ヲ採用スル時ハ、  
衣服風俗モ亦之ニ倣ハスンハ、其業ヲ為シ難シ  
嗚呼、羨望ニ堪ヘ難シトテ、其髮ヲ握リ、手ニ卷キ  
嗟歎シテ、我今此髮ヲ断ントスレハ、愚政府之ヲ  
許サス、敢テ之ヲ断ツ時ハ、國命ニ背ク夫レ之ヲ  
如何セン、若シ韃政ヲ脱シナハ、卑生魁シテ、洋風  
ニ倣ハントイヒ、又我ニ國ヲ去テ既ニ四年、嘗テ



歐人ニ役セラレシ時、頭髪ヲ束ヌルニ、時刻ヲ費  
ストテ、大ニ忿怒ヲ受シ事アリ、早ク此頭髪ヲ断  
ナハ爽快ヲ覺ヘントイヘリ、

余支那人ニ交リタル者、數十人ナレドモ未タ  
曾テ斯ノ如ク、開化シタル者ヲ見ス、凡ソ支那  
人ノ風ハ、已カ國ヲ貴ヒ、又已カ身ノ貴ヒ、他國  
ノ者ヲ賤ム風俗ナルニ、斯ク已カ身ヲ賤シミ  
他國ノ風ヲ貴フハ、支那人ニ稀ナル人物ナリ、  
同二十七日大風起リ、松前沖ニ於テ、船方ニ覆没  
セントス、此時大波ノ船ヲ打ツ音響實ニ百雷ノ

落ルカ如ク、同夜十一時、函館港ニ着ス、

同二十八日上陸シ、佐野與三右衛門カ家ニ寓シ、休息ス、

同二十九日、英國「コンシユル」余カ旅宿ヲ訪ヒ来  
テ曰ク、貴下ハ露國ノ商船「ベリヤ」ニ乗テ、當港  
ニ着セシ由、此船幾回カ沈没セントセシト聞リ、  
今平安ニテ到着アリシハ、欣然カト、余之ニ謝  
シテ後、何故ニ我ヲ訪レシヤ、未タ嘗テ足下ヲ見  
シ事ナシト云タレハ、「コンシユル」答テ、我今日「シ  
ベリヤ」号ノ船ニ行キ、「ウラジワ」ストークノ景況  
ヲ聞キ、又我國ノ商人ヨリ書状来リ、暫時船ニ止



リシニ満洲人兩人便船シテ来リ今上陸セシヲ  
見タリ夫ヨリ満洲人ノ談話或ハ朝鮮ノ事件ナ  
ト咄シ出セシニ船長ノ曰ク日本人ノ武藤ト云  
フ者今度朝鮮ノ子供一人連来リ上陸シテ佐野  
某ノ宅ニ在ト云シ故其朝鮮人ニ面會セント欲  
シテ来レリ我館ニ朝鮮人一名在番セリ願クハ  
足下ノ携へ来レル朝鮮人ニ面會スル事ヲ許セ  
ト云ヘリ余答ヘテ面會ハ許スヘケレトモ此者  
唯朝鮮語ノミヲ解スレハ面會シテ足下其兩人  
ノ談話ヲ聞トモ解スマシ又何故ニテ朝鮮人ヲ

ハ養ヒ置ルヤト問ケレハゴシユル答テ我國  
ノ船芝罘ヨリ當港ニ来ル海上朝鮮國ノ西南ニ  
當テ小船ニテ漂流シ我カ船ニ向テ頻リニ叫ヒ  
シユエ助ケ連来テ今我館ニ在リ未タ一事モ通  
セズ朝鮮ノ何府何縣ノ者ナルヤ又其姓名モ分  
ラス過日日本人ニ托シテ書ヲ以テ其姓名年齢  
ヲ問ハシメシニ書モ解スル事能ハス彼我共ニ  
窮シタリ是故ニ足下ノ連レ来レル朝鮮人ニ逢  
シメ以テ其詳ナル事ヲ聞ント欲ス請フ我カ在  
館ノ朝鮮人ニ逢シメヨト余之ニ答テ我カ連レ



来レル朝鮮人モ其語ノ通スルハ唯朝鮮語ノ三  
足下連レ行トモ必ス解ス事能ハサラントイハ  
ハゴンシユル答ヘテ貴論ノ如ク解スル事アタ  
ハス足下能ク朝鮮語ヲ通セハ我ト共ニ英館ニ  
至リ彼ト對話シテ朝鮮國ノ何道何府ノ産ナル  
ヤ何港ヨリ出帆セシヤ何故ニテ其國ヲ出シヤ  
其姓名及ヒ年齢又父母ノ有無等ヲ聞テ悉ク我  
ニ聞シメヨトテ頻リニ頼ミケル故ゴンシユル  
ト共ニ其館ニ至リ漂流ノ朝鮮人ニ面會シテ其  
始終ヲ問フ朝鮮人答テ私ハ朝鮮國平安道義州

ノ産ニテ李原春ト云フ者ナリ八月二十八日友  
人三名ト約シ偶々小舟ニ艘ヲ浮ヘ細ヲ下シテ  
渚セント欲シ既ニ三人ニテ漕出テ大ニ獲物ア  
リテ將ニ船ヲ陸地ニ返サントセシ時俄ニ大風  
起テ波浪高ク船ハ忽チ覆ラントスル勢ナレ氏  
如何トモスルヲ能ハス唯波ニ從テ流ル、ノミ  
其一艘ノ小舟ニハ二人乗リ私ハ唯一人乗タリ  
其二人乗タル舟ハ遂ニ沈没シテ二人トモニ忽  
チ溺死シタリ私ハ傍倖ニシテ死スルヲナク唯  
怒浪ト共ニ漂流セリ然レドモ船中ニ食物并ニ



水ノ貯ナケレハ、將ニ餓死セントス、斯テ山ヲモ  
亦島ヲモ見スシテ、大海ヲ漂流セシ事十三日ナ  
リ、其間唯衣類ヲ啗テ、饑渴ヲ凌クノミナレハ、終  
ニ活路ナキ事ト思ヒ居シニ、或日遙ニ大船ヲ見  
掛タリ、是ニ於テ此船ニ向テ、我カ聲ノ有ニ限リ、  
頻リニ叫ヒケレハ、大船我カ舟ヲ見テ走り来リ、  
助ケタルユエ、辛フシテ一命ヲ存スル事ヲ得タ  
リ、其厚恩實ニ以テ忘レ難シト云フ、予此意ヲ以  
テ、<sup>ゴ</sup>ンシユルニ告ク、<sup>ゴ</sup>ンシユルノイヘルハ、今  
ヨリ十日間ヲ経テ、彼ヲ東京ニ送り、其後朝鮮ニ

飯ラシメン、聊カ愁ル事ナカレト、予此意ヲ朝鮮  
人ニ告ケレハ、合掌再拝シ、首ヲ叩テ拝謝シ、朝鮮  
人又予ニ向テ、願クハ英將ノ姓名ヲ書シテ以テ、  
我ニ與ヘヨ、朝鮮ニ歸ルノ後、府司ニ謁シテ、英將  
ノ厚情ヲ告ントイフ、予又<sup>ゴ</sup>ンシユルニ、此意ヲ  
通シタレハ、寫真一葉ト、名刺トヲ出シ、之ヲ與フ、  
朝鮮人謝シテ、其寫真ト名刺ヲ懷ニシ、夫ヨリ予  
ニ向テ、貴兄ナクンハ、共ニ情ヲ通シ難シ、今幸ニ  
貴兄ニ達テ、詳カニ我本國并ニ卑姓ヲ通スル事  
ヲ得タリ、多謝多感ト云テ、叩頭シ、又予ニ向テ、願



クハ尊姓尊名ヲ聞シ他日我レ本國ニ皈ルノ日  
府司ニ告ントイヘリ扱夫ヨリ同人歎シテイヘ  
ルハ嗚呼夫レ人情ハ萬國皆同シ日本人我國ニ  
漂流セシ時ハ未タ曾テ助ケザルハナシト聞ケ  
リ隣國ノ交リ猶厚フセスンハ非ス我今英船ニ  
助ケラレテ此處ニ来リタレトモ何國ノ人何國  
ノ船ナル事ヲ知ラス其容貌ヲ見シニ大ニ我國  
人ト異ニシテ衣服モ亦同シカラス扱又本地ニ  
来着シテ後地名ヲ聞ハ函館トイヘドモ何國ナ  
ル事ヲ知ラス又土人ノ容貌ヲ見ルニ我國人ニ

髻鬢タリ次ニ衣袴ヲ見レハ異ナレドモ文字ヲ  
見レハ相同シ是故ニ我カ心中竊ニ日本カト思  
ヒシノミ今始メテ貴兄ニ逢テ日本國ノ函館ト  
イフコトヲ聞テ安然タル事ヲ得タリ願クハ我  
ヲシテ疾ク本國ニ皈ル事ヲ得セシメハ誠歡誠  
喜ニ堪ス我本國ニ父母アリ又妻子アリ父母妻  
子我カ今英船ニ助ケラレテ日本ニ在番スト思  
フ可シヤ唯大海中ニ死シタリト思ヒ悲歎スヘ  
シ且我カ本國ヨリ漂流セシハ八月ナリ今將ニ  
十二月ニ向ントス其間絶テ音信スル事能ハス



嗚呼疾ク本國ニ皈テ雙親ノ悲歎ヲ解キ其心ヲ  
安ンヤントテ頻リニ嗟歎セリ予之ヲ慰メテ悲  
歎スル事ナカレ便船アレハ速ニ國ニ皈ラシム  
ヘシ請フ平安ニ此館ニ留レト云ヒタレハ朝鮮  
人シバタ々再持シタリ

予又問フ平安道義州府ハ京師ヲ距ル事幾里程  
ト三千里ト答フ又戸數ハ幾許ト問ヘハ未タ詳  
カナラサレドモ凡二千ニ過ヘシ城内堅固ナレ  
ドモ鴨綠江ニ近キ處ナレハ戍兵多シ鴨綠江ヲ  
越レハ即チ遼東ナリ僅ニ一江ヲ隔テ他邦ナレ

ハ多ク軍兵ヲ置テ守ラシムルトイフ又問フ義  
州府ノ府司ノ姓名ヲ知レルヤ彼答ヘテ私儀本  
國ニ在テハ平民ニシテ農ヲ本業トシ或ハ漁獵  
ヲ以テ渡世トス是故ニ何等ノ事モ知ズト云フ  
此朝鮮人ハ一文字ヲモ知サル者ニテ真ノ農民  
ナリ

今夜六時汽船出帆スト旅宿ヨリ申来リタル故  
英館ヲ辞シ飯ラントスレハ朝鮮人別レテ惜ニ  
落涙ス予之ヲ慰メテ曰ク歎スルト勿レ憂ル事  
ナカレ足下カ云フ所悉ク之ヲゴシユルニ告



夕  
タリ是ヨリ半月ヲ經ナハ又東京ニ於テ足下ト  
會セントテ相別ル本日夕五時乗船シ函館ヲ出  
帆セリ

第一月三日ノ夜十二時横濱ニ着ス同四日夕五  
時東京ニ着ス露國ウラジワストーク吹風往返  
ノ日記探偵ノ事情斯ノ如シ

明治九年二月